

豊かな4ヶ国を旅して思うこと。

2016・7・24～8・7（15日間の旅）

松高11期 村尾 俊治

はじめに：同期の田中一男君の一言から4ヶ国の旅となった。デンマークのコペンハーゲン3泊、オランダのアムステルダム3泊、スコットランドのエジンバラ3泊、そしてドイツ4泊の主要都市中心の旅である。75歳前後のボケ老人二人の珍道中である。



田中一男君と筆者（右）

今回は歩いて見て回る旅で、一日3.5万歩が限界であった。

田中君の健脚には助けられたが、それにしてもなぜ歩くのか？早朝から夜まで歩くことで、その地域の日常生活（足元）が良く分かるからである。本稿の視点は、歩き回って何を感じたのかである。

1. コペンハーゲンで豊かさを感じたのが事の始まり。
コペンハーゲンの飛行場から中央駅に着き、そこから宿泊予定のHOTELまで徒歩30分のところ、探しながらのため倍ほどかかった。その歩きの中で、デンマークは小さい島の寄せ集めの国なのに、道路の広さ、空間の広さ、自転車交通システムの立派さなどから、なんと豊かな国なのかと感じたのである。（物価は日本より高いが）
そこで、今回訪ねる他の主要都市はいかがなものか？また、なぜ豊かさを感じさせるのかを探ることにした。

2. なぜ豊かさを感じたのか、その共通要因4項目について。

2-1 インフラストラクチャーが充実している。

予てよりインフラには2種類あると思っている。

一つはご存知の水道であり、電気であり、生きてゆくためのインフラである。二つめは生活を豊かにするためのインフラである。

生活を豊かにするインフラについて、今回は公園や博物館にフォーカスして述べてみたい。特に博物館は、その国の歴史、民族、科学技術、国がどのようにして出来たのかなどに関する歴史資料の宝庫である。家族

で、グループで見て学ぶ、正に、教育のインフラといってもよい。この種の博物館は入館料を安くしてある。特にエジンバラは無料でかつ立派である。

機会を設けてでも行って欲しい博物館を5つリストアップしておきたい。

☆エジンバラの国立博物館：子供も大人も学べる無料の4階建ての博物館である。西側4分の1のゾーンは別の建物のように見えるが、そこにはスコットランドが太古の時代にどのようにして出来たのかを展示している。大変珍しい内容である。



太古の姿を見せる岩山

☆ミュンヘンのドイツ博物館：あらゆる分野の科学技術の歴史的発展過程を実物で学ぶことが出来る。じっくり見るには一日かかる。例えば、造船の歴史、バイキング船から現代の船までを実物展示している。Uボートの展示も興味深い。

あらゆる科学技術分野を網羅し、子供達にとって理科教室でもある。ディスプレイ分野ではCRT（ブラウン管）も紹介されていた。

☆アムステルダムの歴史博物館：入館者全員が各展示内容の解説をイヤホンで聞くようになっている。もちろん入館時、日本語用を渡された。展示の見所の一つは民兵の力と働きでスペインからの独立を勝ち取った様子がある。

（前回の旅行で知った博物館）

☆ニュールンベルグのコミュニケーションセンター：ヒトラーの最初の旗揚げ大集会の様様と彼の演説、実録フィルムの上映そして戦争過程における写真の展示、最後は有名な戦犯を裁く裁判の実録フィルムの上映である。事実を見せる事で考えさせる博物館である。

☆ゲルマン民族博物館：蛮族として知らされてきたが極めて高い文化を持つ民族であった事が分かる。大半のドイツ人のルーツである。

ドイツ人の優秀さのベースである。芸術から日常生活までの全ての分野で知恵と工夫が感じられ、しかも緻密である。

驚いた事例として聖母マリアの受胎告知の木彫りの像があったが、なんとお腹の中にキリスト像を造り込んでいた。

2-2 広々とした空間

コペンハーゲンの主要道路は広く感じた、単に広くスペースを使用しているだけでなく、電柱がないのである。このことは、4ヶ国共に徹底している。特にドイツは道路スペースが全般に狭いにも関わらず、電柱がないため空が開け、ずいぶん広く感じる。

2-3 公共の場の清潔さ

特に列車の駅構内や空港内のクリーン度は非常に高い。(日本も最近クリーン度は高くなったが) トランジットで3時間待たされたロンドンヒースロー空港に至っては喫煙箇所を全廃するほどの徹底ぶりであった。先取り感もするが、新築を機会に踏み切ったのだろう。ちょっと驚いたが、これからきっと世界に広がるであろうと確信した。

2-4 ゆったりとした時間の流れ

以前のドイツ赴任で、はじめて体験したのが、日曜日は休息日であり物音一つしないことである。時折、教会の鐘が聞こえるだけで時が止まったような静けさである。読書するか、クラシック音楽を聴くか、外出するかだが、目抜き通りもウインドーショッピングをゆっくりと楽しむ人がぼつりぼつりである。

今回はコペンハーゲンのチボリ公園や近郊の公園における人々の姿が印象的であった。チボリ公園は思っていた程には大きくない。中に入ると中央部分が芝生の広場になっており、平日なのに子供達が好きに、自由に遊んでいる。両親も一緒に遊ぶか、周囲に腰掛けて見守っている。周辺の青空店では老夫婦がビアグラス片手に会話を楽しんでいる。もちろん、見世物、球技店などはあるが。



チボリ公園の広場

もうひとつ近郊の公園に行ってみた。小山あり、谷間あり、湖あり、林あり、緑の芝生の広場ありだが、多くの若者達が芝生の上で自由に遊んでいる。読書する人、踊る人、音楽を聴く人、遊戯する人、寝る人と様々である。悠々としたスローテンポの時の流れを肌で感じた。

3. インフラの重要なひとつとして、住居としての家のあり方。

5年程前に首相が「日本の家も100年持つ家にしないといかん」と言っていたのを思い出した。耐久性の話しだったと思うが、それだけだろうか？それも今は立ち消えになっていないか？

エジンバラの旧市街はエジンバラ城を中心とした名所旧跡の集まりである。

そして新市街は住む為の地域である。

新しいと言っても見た目には何百年も経過した建物ばかりで、それが住居であった。エジンバラの車道も歩道も石が敷き詰められている。

この石畳を時速40～50kmで車が走るとビービーと言う大きな音をする。即、田中君は日本だと大問題であると。しかし、ここでは問題になっていない。なぜか？20～30

cmはあるかという分厚い外壁で出来た3階建て長屋風の高級住宅ビルである。すなわち、堅牢かつ外部音が遮断された住居なので全く問題にならないのである。以前、フランスの大統領が日本人は木製の小さなウサギ小屋に住んでいると言ったことがある。田中君は「その意味がやっと分かった」とつぶやいた。



エジンバラの新市街

ちなみに、我が自治会におけるトラブルで一番多いのが、近隣の音の問題である。エアコン室外機の騒音、水を流す音、車庫の出し入れ時の音、等々。

4. 自転車の交通システムについて（インフラのひとつ）

今回行った国は全て自転車の交通システムを構築してきている。完成度No1はデンマークであった。自転車専用道は歩道よりはるかに広く、専用の信号システムまで備えている。朝の通勤時間帯は正に自転車のラッシュアワーである。

ドイツはさほど完成度は高くなく、道路の幅も日本並みなので自転車走行は容易ではない。しかし、右側通行のルールをきちっと守るので、それを前提に狭いながらも人間の肩幅プラスアルファの自転車専用道を設けている。日本人観光客はこの専用道の認識が薄く意識が甘いため、つい自転車専用道に立ち入って注意される例が多い。(非常に危険な行為だと、真剣に叱られる)



自転車専用道と信号機

5. これもインフラのひとつ、交差点のロータリー化
信号機のないロータリーはデンマーク、オランダ、エジンバラなどの市街では見られないものの郊外では随分見かけた。特にオランダでは多く見られた。

今回は、ドイツのシュツツガルト市内での取り組みについて述べる。空間の余裕が無い中、用地を広げることなく、いろいろ知恵を絞って作っている。25年程度前からフランスに学び導入してきている。狭い空間でいかに作るか、いかに安全に走行できるようにするか、知恵を出し工夫を重ねている。

地震国の日本には大変有効なインフラになりうる。交差点に電気が不要なのだから・・・。

交差点内で自動車がUターン出来るくらいの広さがあれば十分である。

(遅まきながら日本でも実証実験が始まっているようではある)

『ドイツには横断歩道が二種類あると言う話』

一つは、信号機の無いゼブラタイプ(日本と同じ模様)。

二つは、信号機があり両サイドに破線が引いてあるだけのタイプ。

ドイツでは自動車運転の基本的考えとして歩行者優先、人命第一が徹底されている。(日本も同じと思うが)

その前提のもと、ゼブラタイプは歩行者優先で飛び出しも許される横断歩道である。従ってゼブラタイプに近づくと最低速度の徐行運転で神経を使いながら走行するべきである。一方の破線タイプの横断歩道では、歩行者が歩行者用信号を守るので信号通りに運転をすれば良い。

学校近くのスクールゾーンは、ほとんどゼブラタイプである（日本では発想が逆）。今回気づいたがロータリー手前の横断歩道もゼブラタイプが多かった。

6. 最後に

巡った国々がかねてより福祉に力を入れてきた国だということは周知のことである。歩き回ってその真髓を感じ取ってきた。さて日本はどうか？

今春来日したウルグアイ第40代大統領ホセ・ムヒカさんが日本人に問いかけた。

『皆さん幸せですか？』

『我々は経済を発展させるために生まれたのではありません、幸せになるためです』

『もっと毎日の人生を、その一瞬をしっかりと味わって暮らせるなら、それはとても幸せな事です』

朝日新聞に国民の給与に関する記事があったので引用する。

1991年から2014年の給与ランクの変化は、
日本：9位→19位、オランダ：3位→7位、デンマーク：8位→8位、
ドイツ：10位→12位、イギリス：15位→13位。
何れの国もほぼ順位を下けているが、日本以外は給与額で上げている。日本だけが順位も給与額も下げているのである。

因みにこの記事のタイトルは『取り残された日本』であった。

日本は未だに過去の経済大国を目指しているよう思えてならない。

『なにが幸せのために必要なのか』に向け、限られた金を有効に使う知恵が必要な今日ではないだろうか？

以上

その1：エジンバラの夜

この地では中華料理店へ同じ店に3日間通った。二人で新市街地を歩きながら探した店で、名前は『平安酒家』。久しぶりに麺類を食べながらビールで乾杯し一息ついたら、BGMが流れだした。何と、これは日本の歌ではないか！まるで日本にいるようで、曲名は「星影のワルツ」、「信濃川」、そして「夫婦春秋」。マスターに、何故この曲なの？と聞いたが、「NO IDEA」とつれない返事。それにしても、英国人、中国人客の多い中、日本人は我々二人だけなのに、何故日本の曲が流れていたのだろうか？旅行中ずっと頭から離れなかった。

その2：(加齢によるボケ1) エジンバラ国立博物館で

一通り見終わってそのまま出口へ行ったが、城で買った土産物をどこかに置き忘れたことに気づく、慌ててエレベーターに走る。どうもVTRを見ていて、こっくりこっくりしていたらしい。実は既に落し物として届けられており、無事に戻っていたが、田中君は拙い英語で必死に探し廻っていたようだ。老人には注意が必要だが、忘れ物を防ぐ知恵がいる。

その3：(加齢によるボケ2)

夕方歩き疲れてHOTEL (B&B) へ着いた途端、ポケットに鍵がない。全てのポケットを探したが無い。支配人に失くしたことを告げると、弁償金約5000円とのこと。仕方なく合鍵を借り部屋に入る。

一休憩の後、夕食に出掛けるとき、何気なしに田中君がポケットから鍵を出してきた。どうなっているのか？鍵は常に村尾が預かるルールだったが、何時彼のポケットに移動したのか？二人共に思い出した。早朝、市バス停留場へ向かう途中、今日投函予定の絵葉書を忘れたことに気づき、田中君『よし、ひとつ走り行って来るわ』と云ってくれた。その時、鍵を渡したのであった。絵葉書を受け取る頃には、もう鍵の事はすっかり二人の頭になかったのである。